

『クリスチャンの妻として②』

'23/02/26

聖書箇所：エペソ人への手紙 5章 22-24 節（新約 p.379-）



先週の礼拝で、私たちは、クリスチャンの妻に対する聖書の教えを学びました…。もしも、私たちが神様に祝福される夫婦を…。あるいは、神様が喜んでくださるような家庭を築いていこうとするのなら、聖書のみことばを学び、そのみことばを実践する以外に、そこに到達する道はありません！だから、私たちはみことばを学ぶのです。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日の聖書箇所である、エペソ 5:22-24 をお開きください。初めにお読みいたします…。

命題：「クリスチャンの妻は夫に従うべき」ということの、間違った理解？

22 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。

23 なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

24 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。

先週も言いましたが、今の、このような時代に、「妻は、自分の夫に従うべきである！」などというようなことを言いますと、ある方は、「時代錯誤である！ 2000 年も前に書かれた古い教えを今更…」などと思われるかも知れません…。しかし、神様の教えに昔も今も関係ありません。何より、神様は、私たち人間のすべてを御存知です。どうすれば、私たちが幸せになれるのか…。一体、どうしたら、私たちが霊的に成長していけるのか…。そういったことをすべて御存知の上で…。神様は私たちに必要な忠告（＝アドバイス）を与えてくださっているのです。

そういうわけで、先週に引き続いて、私たちは、今先程、読んだみことばが教えて「いない」…。間違った理解について、ご一緒に確認していきたいと思っております…。今回、このような命題でお話するのは、時々、聖書の教えが行き過ぎて…。間違っ理解されてしまっていることがあるからです。ですから、こういった命題で学んでくださることによって、皆さんが、よりはっきりと、聖書が教えていることと…。逆に、聖書が教えていないことを…。明確に区別できるようになってくださることを願います…。

I・妻は、夫の「しもべ」である？（22 節）

まず、先週に学んだことは、「妻は、夫のしもべである」、というような「間違い」です。妻は、自分の夫の言うことや行なうことに対して、ただ、「ハイ、ハイ…」とだけ言って、従っていれば良いというのは、明らかに、聖書の教えではありません…。

その…。1つの根拠は、ここ 22 節や 24 節で、『従う…』と訳されてある言葉（ὑποτάσσω）です。この言葉は、子どもが自分の親に対して…。あるいは、奴隷がその主人に対して…、「従いなさい！」と命じられている言葉とは違うものでした…。妻がその主人に対して、「従いなさい！」と命じられている言葉は、単なる命令ではなく、どちらかと言うと、自発的な行為…。謙遜の延長線上にあるような…。あるいは、自由意志から来るような従順…。へりくだりのことなのです。

実は…。先週はお話することができなかったのですが…。ここで、パウロが言いたかったことの真意を、現代に生きる私たちが理解するために、少しお話しさせてください…。皆さんもご存知の通り、2000 年前の、この当時の女性に対する扱いは、現代に生きる私たちの感覚からすると、実にひどいものであったようです。当時、女性は「もの」であって、男性と対等な存在…。として見られてはいませんでした。

幾つか、そういった実例を挙げさせていただきます…。例えば、当時のユダヤ人の男性たちは、毎朝、神様に、自分を異邦人や奴隷…。そして、女性に造られなかったことを感謝するような祈りを捧げていたのだそうです。また、離婚に関することも、この当時の女性の地位が、いかに低かったかということを表わしていると思います…。このことに関しては、以前、「山上の説教」のメッセージの時にもお話ししましたが、当時の妻たちは、今では考えられない程、ほんの些細なことで離婚されてしまうことがあったのだそうです。例えば、妻が塩を入れ過ぎて、食事をダメにしまったとか…。頭に被り物をしないでのおおびらに歩き回ったとか…。あるいは、夫の居る前で、夫の両親のことを悪く言ったとか…。争い好きであるとか、うるさいとか、あるいはまた…。夫が妻以上に魅力的な女性を見付けたりした、なんて理由で離婚されることもあったようです…。

しかし、それとは逆に、妻の側から離婚をする場合には、夫がツアラアト（≡重い皮膚病）であるとか、反逆者であるとか…。性的に淫らな職業に就いてしまっていたなどという場合を除いて…。ほとんどの場合、妻からは離婚を申し出る権利が無かったのだそうです…。このように、当時は、妻の側は理由が何であって離婚されてしまう可能性があったのに…。逆に、妻の側から離婚を申し出ることは、ほとんど不可能であったようです…。

また、問題は、そういったような「離婚の理由」だけに留まりません…。離婚の方法においてもそうでした。この当時、夫が妻を離婚するには、決められた書式で、離婚状を書いて…。その妻が持ってきた持参金を添えて…。それを2人の証人たちの前で手渡すだけで良かったそうです。

今から 2000 年も前は、こんな風な時代でありました…。もちろん、すべての結婚が、このようなものであったというわけではなくて…。幾つかは、美しい愛の物語も残ってはいるのですが…。当時は、時代として、このような流れの中にあつたということなのです…。

そのような時代にあつて、1番の被害者はその子どもたちであり、またもちろん、妻たちであつたらうと思えますが…。いずれにせよ、2000 年前の当時は、このような時代でありました…。皆さん、分かってくださいます？ パウロが、この「エペソ人への手紙」を書き送った時代…。妻たちは非常に弱い立場であつて…。夫に従う以外にない…。そんな時代であつたのです。ですから、パウロが、ここで言いたかったことは、そんな中であつて、イヤイヤ、自分の夫に従うのではなく…。喜びをもって…。自発的かつ、自由意志でもって…。神である主に従うように、夫に従っていきなさい、ということであつたのです…。

そもそも、神様が、初めに、男と女を造ってくださった時、夫婦の関係は、そのようなものではありませんでした。1番最初の夫婦であつたアダムとエバとの関係はお互いが相手の必要を満たすような…。バランスの取れたものでした…。しかし、アダムとエバが罪ある存在となつてしまつたところから、その関係が崩れてしまつて…。お互いがお互いを自分のために、支配しようとするようになってしまつた…。と聖書のみことばは教えてくれていました。

ですから、私たちが夫婦の問題であつたらうと…。あるいは、人間関係の問題であつたらうと、それらを根本的に解決しようとするなら、必ず必要になってくるのは、そこにどのような罪があつて…。その罪がどのような影響を及ぼしてしまったのか、ということを理解することです。そして、その罪をしっかりと悔い改めて…。その罪を清算し…。そして、神様に清めていただく以外に無い…。そう、私たちは考えるわけです。

II・妻よりも、夫の方が「優れて」いるから？（23 節）

その次に、私たちが確認しておきたいことは、妻よりも、夫の方が「優れて」いるから…。だから、妻は夫に従うべきなのだ、というような…。これまた、「間違っ理解」です。聖書は、決して、男性と女性とを比べて、どちらが勝っているとか、どちらの方が劣っているなどというようなことは、一切教えてはけません…。

それどころか…、どうか、ガラテヤ 3:26-28 をご覧いただきますと、『26 あなたがたはみな、キリスト・イエスに対する信仰によって、神の子どもです。 27 バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです。 28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって、一つだからです。』とあって…、イエス・キリストを信じて、救われた者は皆…、等しく、『神の子ども』であると言うのです！

この当時、女性は、男性たちと同じような人権を保障された人間ではなく、まるで、“もの”のように扱われていた時代からすると、ものすごく、現代風な教えだとは思われませんか？…イエス・キリストを信じ、救われたら、もうすべての者たちは皆、神の子どもであって、キリストという着物を、その身に着ているのだ！ということ、このみことばは教えてくれています！…そこにはもはや、人種や身分、あるいは、性別による差別は一切無い！ということ、みことばは教えてくれています。だったら…、どうして、今日の聖書箇所は、妻は夫に従うべきである、などと教えるのでしょうか？

●妻が夫のリーダーシップに従うべき理由

①それが、神様のお定めになった 秩序 だから…

そのことに関して、ここ 23 節のみことばが初めに教えてくれている理由は、「それこそが神様の御定めになられた秩序だから」ということです。ここ、23 節をご覧くださいと、『なぜなら…』とあって、妻が夫に従うべき理由が挙げられています。それは、『キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるから…』ということです。このことを少し別の言葉で言い換えますと、「夫は妻にとつての、リーダーである」ということです。神様は、男女の優劣ではなく…、夫婦間における“秩序”として、夫婦の順位というべきものを定められたのです。

どういふことかと言いますと…、前回に私たちが学んだように、神様が私たち人間を御造りになられた時、聖書はどのように教えてくれています。創世記 2:24、『それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。』って…。これは、アダムとエバのことだけを想定した言葉ではありません…。何故なら、アダムにも、エバにも、『父母』は居ないからです。これは、基本的には、すべての人間を想定した言葉なのです。だから、今日のみことばのすぐ後の、エペソ 5:31 でも、同じことが繰り返されています。『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。』と教えられてある通りです。

こういったみことばからも、神様のみこころは明らかです。神様のみこころは、「夫婦が一致すること！助け合うこと！」なのです。そうですね？…でも、私たちは知っています。私たち人間は、それが例え、熟年夫婦であっても…、あるいはまた、新婚ホヤホヤの夫婦であったとしても、罪のゆえに、あるいは、考え方などの違いのゆえに、一致できないことがあることを…。そんな時、私たちはどうすべきなのでしょう？

例えば、そういった時に、リーダーシップというものが必要になってくるのではないのでしょうか？…実例として、野球などのゲームで采配に迷った時、同じ権限を持った監督が2人居たら、どうなります？一方の監督はバントを命令し、もう一方の監督がヒットエンドランを命令したら、その選手は、どちらに従ったら良いか、分からないじゃないですか！…家庭における夫婦も同じです。夫と…、妻が、その両方とも全く同じ権限を持っていたら、家庭は混乱します。そういった意味においても、家庭には「秩序」というものが必ず必要なのです。これは、どちらが優れているか、という話ではありません…。

今日のみことばの 23 節に、『夫は妻のかしらであるから…』とありますが、ここで、『かしら』と訳されてあるギリシヤ語の言葉(κεφαλή)は、「頭という意味の他に、権威の所在、支配者…」といったような意味があります。確かに、神様は、夫婦間においては、その夫にリーダーシップを…、つまりは、権威を御与えに

なられました。それは、創造の初めから、そうだったのです…。

ちょっと、皆さん。創世記 3:8-12 をご覧ください。『8 そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である【主】の声を聞いた。それで人とその妻は、神である【主】の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。 9 神である【主】は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」 10 彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」 11 すると、仰せになった。「あなたが裸であるのを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」 12 人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。』

⇒初めに、禁じられていた善悪の知識の木の実を取って食べたのは、アダムではなく、エバの方でした…。しかし、神様が、そのことを夫婦2人の内、初めに問いただされたのは、そのエバではなく、アダムの方でした。…と言うのも、神様は、夫であるアダムに対して、直接、御語りになり…、そのアダムに、夫婦のことを任せられたからであると考えられます。確かに、神様が、初めに、善悪の知識の木の実に関する警告をされた時、エバはまだ造られてはいませんでした…。しかし、神様は、エバが造られた後に、改めて、警告することもできましたが、神様は、恐らく、そうはされなかったのです…。

神様は、そのように、夫婦の中にあつては、夫の方に、そのリーダーシップと言うか…、夫に対して、より大きな権威を御与えになって…、夫婦の中で、そのリーダーであるアダムと語り…、夫により多くの責任を御与えになられたのではないのでしょうか？

②妻は、夫の 愛護 によって守られているから…

もう1つの理由は、妻が、夫の“愛護”によって守られているからです。ここで、もう1度、今日のみことばの 23 節をご覧ください。『なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。』とあります。このみことばが教えてくれているように、『キリストは教会のかしら…』であります。…と言いますのも、「イエス様は、私たち教会の救い主であるから」です。イエス様は、私たちを罪から救うため、自ら進んで、あの十字架にかかってくださって…、本来ならば、罪を犯した私たちが受けるべき罪の罰を身代わりを受けることで、罪の贖いを成し遂げてくださいました。そのことを、はっきり証明してくれたのが、イエス様の復活です！イエス様は、約束通り、3日目に、あの十字架の死からよみがえってくださったのです！…しかし、このみことばは、そのことと関連して、『夫は妻のかしらである…』ということを主張しています。これは一体、どういうことなのでしょう？

⇒実は、聖書の中で、『救い主』と訳されてあるギリシヤ語の言葉「ソーター(σωτήρ)」は、一般的には、「救助・救済する者、解放する者、保護者…」というような意味を持っています。恐らく、この個所の妥当な解釈は、かしらであるイエス様が今も、そのからだである教会を愛し慈しんでくださっているように…、ということを教えているように思われます。現に、今日のみことばのすぐ後、エペソ 5:29-30 でも、『29 だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。 30 私たちはキリストのからだの部分だからです。』とあって…、キリストが、ご自分のからだである教会を救ってくださっただけでなく…、その後も養ってくださっている、ということを見せてくれているからです…。つまり、多くの場合、夫は、その妻や家庭を養ってくださっているでしょ！ということだと思います。

そうして、実際、1ペテロ3:7では、『同じように、夫たちよ、妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。…』とあって、妻が女性であるが故に夫と比べて、肉体的には弱い存在であるから、いたわりが必要である…、ある種の支えが必要だということが言われています。このように…、一般的には、妻は夫の庇護(＝守り、保護)のもとにあるわけですから、妻たる者は、その夫を立てて…、その夫に従っていきなさい、と教えるのです。

でも…、ここでも、ひょっとしたら、こんな言い訳が出てくるかも知れません…。それは、「自分の夫が、自分のことを願ってくれないから…、自分を愛し、保護してくれないから、私は夫に従わなくても良いのです！」というものです。これに関しては、先週も見たように、I ペテロ 3:1-2 で、『1 同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです。2 それは、あなたがたの、神を恐れかしこむ清い生き方を彼らが見るからです。』と教えられてあるように…、例え、ご主人が、聖書的に見て、正しい夫ではなくても、妻の責任には何ら変わりはありません…。

ひょっとしたら…、一般社会のルールでは、それが例え、夫婦の間柄であったとしても、「ギブ&テイク」と言うか…、夫がこれだけのことをしてくれるから、自分のそれ相応のことをしていこう！しかし、夫が自分に何もしてくれないのなら、自分も夫に対して、何もしないでおう！というのは、決して、神の前に、正しい態度でないことは、皆さんもよくご存知だろうと思います。

…と言うのも、ローマ 12 章のみことばは、こう教えますでしょ？ローマ 12:17-21、『17 だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。18 あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。19 愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」20 もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。21 悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。』と教えられてあるように、私たち1人1人の神様に対する責任は、皆さんの夫が正しくないからと言って、軽くなるようなものではありません！私たちに対して、天の神様が期待しておられることは、「例え、相手がどうであろうと、私たちは、神様の前に正しいことをしていく！」ということだけなのです！

●じゃあ、夫に アドバイス することは？

以上…、これまで見てきましたように、男性と女性とで、どちらか一方が勝っているとか劣っているとか、ということでは決してありません…。しかし、一点だけ、明らかに、聖書のみことばが教えてくれていることがあります。それは、先程見たような肉体的な部分です。肉体的に見れば…、その腕力だけを見れば、女性よりも男性の方が勝っているように見えます。しかし、そのことと男女の優劣とは全く関係がありません。だって、そうですね？…皆さんも、自分よりも腕力が強いからと言って、その人のことを自分よりも優れた人間である…、とは思われないでしょ。それと同じです…。

また、ある人は、創世記 2 章に、『ふさわしい助け手』(創世記 2:18)とあるから…、女性は男性の、『助け手』として造られた、とあります。英語で言う、「ヘルパー、コンパニオン、サポーター」となるのでしょうか？…でも、主人公は、あくまでも、夫であって、妻の方は、それをサポートする側だから…、だから、女性の方が劣っている？なんて思われるかも知れませんが、それも確実に違います。

例えば、ヨハネの福音書では、聖霊なる神様が、私たちクリスチャンの『助け主』(ヨハネ 14:16,26; 15:26; 16:7)であるということが教えられてあります。また、ヘブル 13:6 では、神様こそが、私たちの『助け手』であるということが教えられてあります(原語では違うが…)。つまり…、主人公の方が優れていて…、その存在を助ける側は、それよりも劣っているなんてことは、決してないのです。

そのように、男であろうと、女であろうと、私たちは皆同じです…。皆、同じように、神のかたちに似せて造られ…、同じように罪を持って生まれ…、同じように失敗や間違いを犯す存在です。だから、と言うわけでもありませんが、妻である皆さんが、自分の考えをもって、ご自分の夫に対して、アドバイスや忠告をすることは決して、間違ったことではないのです…。

例えばね、皆さん。皆さんもよくご存知のエピソードです…。その昔、天の神様が、あまりの罪深さのゆえに、ある町を滅ぼそうとされたことがありましたでしょ？…その町とは、あの有名な「ソドムとゴモラ」です。…あの時、ソドムの町を滅ぼそうとされた神様に対して、アブラハムがなした「執り成し」に、どうか、注目してください…。

創世記 18:20-33、『20 そこで【主】は仰せられた。「ソドムとゴモラの叫びは非常に大きく、また彼らの罪はきわめて重い。21 わたしは下って行って、わたしに届いた叫びどおりに、彼らが実際に行っているかどうかを見よう。わたしは知りたいのだ。」22 その人たちはそこからソドムのほうへと進んで行った。アブラハムはまだ、【主】の前に立っていた。23 アブラハムは近づいて申し上げた。「あなたはほんとうに、正しい者を、悪い者といっしょに滅ぼし尽くされるのですか。24 もしや、その町の中に五十人の正しい者がいるかもしれません。ほんとうに滅ぼしてしまわれるのですか。その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにはならないのですか。25 正しい者を悪い者といっしょに殺し、そのため、正しい者と悪い者が同じようになるというようなことを、あなたがなさるはずがありません。とてもありえないことです。全世界をさばくお方は、公義を行うべきではありませんか。」26 【主】は答えられた。「もしソドムで、わたしが五十人の正しい者を町の中に見つけたら、その人たちのために、その町全部を赦そう。」27 アブラハムは答えて言った。「私はちりや灰にすぎませんが、あえて主に申し上げるのをお許しください。28 もしや五十人の正しい者に五人不足しているかもしれません。その五人のために、あなたは町の全部を滅ぼされるでしょうか。」主は仰せられた。「滅ぼすまい。もしそこにわたしが四十五人を見つけたら。」29 そこで、再び尋ねて申し上げた。「もしやそこに四十人見つかるかもしれません。」すると仰せられた。「滅ぼすまい。その四十人のために。」30 また彼は言った。「主よ。どうかお怒りにならないで、私に言わせてください。もしやそこに三十人見つかるかもしれません。」主は仰せられた。「滅ぼすまい。もしそこにわたしが三十人を見つけたら。」31 彼は言った。「私があえて、主に申し上げるのをお許しください。もしやそこに二十人見つかるかもしれません。」すると仰せられた。「滅ぼすまい。その二十人のために。」32 彼はまた言った。「主よ。どうかお怒りにならないで、今一度だけ私に言わせてください。もしやそこに十人見つかるかもしれません。」すると主は仰せられた。「滅ぼすまい。その十人のために。」33 【主】はアブラハムと語り終わられると、去って行かれた。アブラハムは自分の家へ帰って行った。』

⇒この時のアブラハムは、天の神様に向かって、何と、意見というか、神様の憐れみを請うたのです。正直、今の私たちからすると、信じられないほど、大胆に、神様に向かって、「こうじゃないでしょうか？ああじゃないでしょうか？」と言って、必死になって、神様に、自分の願いや意見を申し上げるわけです。ね…、皆さん、どう思われます？…神様は、私たち人間とは違って、完全な御方です。決して、間違いなどは犯されません！…でしょ？

でも、そんな神様に対して、アブラハムは、自分の意見や願いを訴え出て、神様に憐れみを請いました。そうして、神様もまた、そのアブラハムの意見に耳を傾けてくださって、ソドムの町が減じない条件を、最初は 50 人だったのが、45 人…、40 人、30 人と下げていってくださるのです。

時々、「天の神様は、最善なる神様の御計画を御持ちなのだから、私たちが祈っても祈らなくても、結果は、変わらない…」と言われることがありますが、私は、そうじゃないと思います。…と言いますのは、ここで、天の神様がアブラハムの執り成しに耳を傾けてくださって、その基準を変えていってくださったからです。…もちろん、最終的に、ソドムとゴモラの町は滅ぼされてしまいました…。結局は、何も変わらなかったのかも知れません。しかし、完全な神様に対して、このように、自分の考えを申し上げることが許されるなら…、たくさん罪やたくさん間違いを犯し得る、私たち人間の夫や為政者に、その奥さんや私たちが、自分たちの意見を申し上げることは、何ら、間違っていないのではないのでしょうか？…違います？

どうぞ、もう1か所、ご覧ください。今度は、あのモーセが、神様に対して、執り成しをしたエピソードです。出エジプト記 32:7-14。『7 【主】はモーセに仰せられた。「さあ、すぐ降りて行け。あなたがエジプトの地から連れ上ったあなたの民は、墮落してしまつたから。8 彼らは早くも、わたしが彼らに命じた道からはずれ、自分たちのために鑄物の子牛を造り、それを伏し拝み、それにいけにえをささげ、『イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ』と言っている。」9 【主】はまた、モーセに仰せられた。「わたしはこの民を見た。これは、実にうなじのこわい民だ。10 今はただ、わたしのするままにせよ。わたしの怒りが彼らに向かって燃え上がって、わたしが彼らを絶ち滅ぼすためだ。しかし、わたしはあなたを大いなる国民としよう。」11 しかしモーセは、彼の神、【主】に嘆願して言った。『【主】よ。あなたが偉大な力と力強い御手をもって、エジプトの地から連れ出されたご自分の民に向かって、どうして、あなたは御怒りを燃やされるのですか。12 また、どうしてエジプト人が『神は彼らを山地で殺し、地の面から絶ち滅ぼすために、悪意をもって彼らを連れ出したのだ』と言うようにされるのですか。どうか、あなたの燃える怒りをおさめ、あなたの民へのわざわいを思い直してください。13 あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルを覚えてください。あなたはご自身にかけて彼らに誓い、そして、彼らに、『わたしはあなたがたの子孫を空の星のようにふやし、わたしが約束したこの地をすべて、あなたがたの子孫に与え、彼らは永久にこれを相続地とするようになる』と仰せられたのです。』14 すると、【主】はその民に下すと仰せられたわざわいを思い直された。』

⇒この時、モーセも、神様の前に大きな罪を犯したイスラエルの民たちのために、執り成しをしています。何と、神様は、そのモーセの執り成しにも耳を傾けてくださって…、イスラエルの民たちに下されるはずの裁きを思い直して下さったのだ！とこのみことばは教えてくれています。

<励ましの言葉>

このように、天の神様は、私たちの願いや思いというものを汲んでくださって…、その上で、主の最善というものをなして下さるのではないのでしょうか？…神様は、私たちの祈りをきいてくださるし…、私たちの祈りや願いによって、その時々状況は違って来るし…、その時々状況によって、神様の最善というものは変わり得るのではないのでしょうか？…ひょっとしたら、私たちは今、そういったことの実例を、聖書のみことばを通して確認したのではないのでしょうか？

この聖書が教えてくれている神様は、すべてを御存知で…、完全なる御方です。しかし、そんな神様が、裁かれて当然の罪人にしか過ぎないアブラハムやモーセの意見に耳を傾けて、その思いを汲んで下さったのです…。その神様に比べて…、私たちは1人1人、はるかに愚かで罪深い存在です。言うまでもなく…、私たちには、助けやアドバイスが必要です。

前回に学んだように、私たち人間は皆、愚かで弱い存在です。1人だと何もできない…。でも、そんな私たちだからこそ！天の神様は、私たちが互いに助け合い、支え合えるように、夫婦という関係…、また、結婚という制度を作ってくださったように思います。また、私たちの弱さを御存知だからこそ、神様は、こういった教会といった集まりや、何より、聖霊という助け主を私たちに与えて下さったのではないのでしょうか？

どうか、今一度、神様の前に、自分がいかに弱く…、愚かな罪人であることを認めて、神様の前にへりくだって、互いに、仕え合う者…、互いに支え合っていく者となっていきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。